令和７年度版
意見発表会
原稿作成の手引

北海道帯広農業高等学校
農業クラブ

意見発表会とは

意見発表の目的

農業クラブ三大事業の一つで、クラブ員の身近な問題や将来の問題について抱負や意見を交換し、クラブ員の三大目標を高めるとともに、**主体的に問題を解決する能力と態度を養う**ことを目的としている。

発表する内容について

発表内容は、農業クラブ員が日ごろの農業関係科目の学習をとおして、学んだり考えたりしていること、及びそれらを発展・応用したもの。

つまり

農業に関する発表をすることが大前提なのだ！！

みなさんも、農業に関する内容で、頑張って原稿を作成してください！

発表内容について

～分野の具体的な発表内容～

発表分野	内容	具体的な発表内容（例）
Ⅰ類 農業生産 農業経営	1.農業生物の育成や生産性向上に関すること 2.農業生産物の加工・流通・消費に関すること 3.農業経営や経済活動に関すること	・栽培、飼育に関する意見 ・肥料や薬剤に関する意見 ・農業生産物の加工・流通・保全・管理に関する意見 ・農業経営・農業経済に関する意見　など
Ⅱ類 国土保全 環境創造	1.国土の保全や環境創造に関すること 2.森林資源の活用に関すること	・農業土木や造園、林業の事業計画・実施・管理に関する条約 ・生物多様性の保全に関する意見 ・林産物の利用に関する意見 ・持続可能な環境の創造に関する意見　など
Ⅲ類 資源活用 地域振興	1.園芸作物や社会動物の活用に関すること 2.地域資源の活用や地域の復興に関すること	・園芸作物や社会動物を用いた生活の質を向上させる意見 ・療法や交流に必要な技術に関する意見 ・農山村社会や地域社会に根差した事業の振興に関する意見 ・地域資源の魅力創造・異業種連携・商品価値の創造・情報の活用と発信や観光に関する意見 ・食農教育や農福連携に関する意見　など

農業クラブの実施基準によって、何について書かなければならないのかは決まっています。上記の分野に当てはまるようなテーマで原稿を作成しよう！

農業科・食品科・酪農科はⅠ・Ⅲ類
農業土木工学科・森林科はⅡ・Ⅲ類
が書きやすいね!!

原稿の書き方

テーマは決まったけど、どうやって書けばいいの？？

原稿作成の手順

1 自分の興味のある分野について、インターネットで調べたり、これまでの学習で学んだことを踏まえて課題を決める。

2 課題を解決するために、１で調べた内容や自分が行ってきた取組を整理する。

3 ２で整理した内容をもとに、解決するための具体策を整理する。

4 課題の設定から解決に向けての流れができたら、整理した内容をもとに原稿を作成する。

※目安は**1600字以上**

自分の家は農家じゃないから書けない。と言う人がいますが、農家じゃなくても問題ないです！
自分が考える課題に対して、どう解決していくかという視点で考えてみましょう。

過去の全国大会に出場した原稿を見てみよう！
なるほど！と思ったところは参考にして書いてみよう！

過去原稿を見てみよう（分野１類）

令和6年度農業クラブ全道意見発表大会出場
タイトル「幻のじゃがいも「今金男しゃく」の継承　～私が目指す農業経営～」

丸く美しい外観と糖度が高くホクホクした食感が特徴の男爵いも。北海道南西部の中央に位置する今金町では、広大な丘陵地が広がっておりコメやコムギ、「今金男しゃく」というブランドジャガイモが生産されています。昭和30年から農協独自の基準による圃場の検査、収穫量の4割が除外される選別、ライマン価13.5パーセント以上という厳しい検査・基準をクリアして出荷され続ける「今金男しゃく」は、平成30年に地域団体商標、令和元年に農林水産省地理的表示保護制度GIに登録されました。しかし、「今金男しゃく」の生産量は8,820トンと少なく、北海道全体の生産量173万トンのおよそ0.5パーセントと、希少なジャガイモで、市場関係者からは「幻のじゃがいも」と呼ばれています。

父で4代目となる今金町の森川農場は、1920年、私の高祖父の代から農業を営んでいます。現在は経営耕地面積30haで、コメ、ジャガイモ、コムギ、ダイコンの4品目を生産しています。私も小さい頃から父や祖父のそばで収穫の補助などの簡単な農作業の手伝いをしてきました。中学校入学後、総合的な学習の時間で今金町の農業について学習し、農家の高齢化や減少という現状を知り、「将来農業を継ぎ、自家の経営を拡大したい」、「生産者が減っている今金男しゃくを守りたい」という夢を抱いた私は、故郷から遠く離れた十勝で大規模な畑作農業を学ぶために帯広農業高校農業科学科への入学を決めました。

帯広農業高校に入学して以来、農業の基礎から実践について座学や実習を通して様々な学習を行ってきました。2年生になり、作物の授業でカルビーポテト株式会社の三浦さんが来校し、ジャガイモ栽培についての授業がありました。高校の圃場で栽培する加工用ジャガイモの生育に合わせた年4回の講義で、種いもの植え付けから収穫、加工して製品になるまでの一連の流れを学習するとともに、生産者にとっての宿敵である緑化いもや病害の発生を防ぐノウハウについて教えていただきました。契約農家への栽培技術指導を担当するフィールドマンの牛媛南さんから「ジャガイモの生産には作業機の点検や圃場の見回りなど、生産者の日々の努力が欠かせない」と、伺いました。植え付けや収穫などの代表的な作業しか経験してこなかった私は、授業を通して農業という仕事に従事することの難しさ、手間の多さを思い知ったと同時に、将来「今金男しゃく」を生産する者として、半世紀以上にわたって受け継がれてきたブランドの品質を落とさないために、自家の栽培でも圃場観察や栽培管理などの基礎・基本を確実に実践し、「今金男しゃく」を守り継承していきたいと強く考えるようになりました。

作物の授業で教わったことを基に自家の経営に置き換えて経営分析をすると、反当たり8万円の農業所得を得ている我が家は、毎年平均2ha栽培しているため、年間で160万円の収益を「今金男しゃく」は我が家にもたらしています。牛媛南さんの授業で教わった緑化いもを防ぐ植付深度の調整を就農後実践し、我が家で毎年3～5％発生している緑化いもを防ぎ、所得向上につなげたいと考えています。加えて、農地の購入や、町内の高齢農家のリタイアによる今後の栽培面積の拡大も視野に入れると「今金男しゃく」が我が家の経営にもたらす可能性はとても大きいものになると見込んでいます。そのため、今後の展望として「今金男しゃく」の栽培面積を10ha以上へ拡大、収益目標年間1,000万円を目指します。

また、生産したジャガイモは農協の選果場でさらに選別され、規格外品が出ているのが現状です。そこで、規格外品を有効活用するために、地域の食品関連産業との連携を強化する必要性があると感じています。将来的には、地域の食品関連産業との共同プロジェクトを通じて、地域経済に貢献しながら、「今金男しゃく」の知名度と価値をさらに高めたいと考えています。このように、生産者・農協・食品関連産業が連携することで、持続可能な農業経営を実現し、地域全体の活性化を図ることを目指します。

私は高校卒業後、実家で就農します。「経営耕地面積の拡大」と「今金男しゃくの継承」という夢を抱き、その夢を具体的なビジョンにすることができた高校３年間で学んできました。その農業の知識・経験を自らの経営へ活かし、今金町の農業のさらなる活性化、「幻のじゃがいも・今金男しゃく」のブランド保護・生産性向上に力を尽くします。さらに、私は農閑期である冬の間、海外への短期留学を行い、大型農業機械を導入した先進的かつ省力的な作物生産技術や規模拡大の効率化を学び、日本でのスマート農業に適した方式へコンバートし自家へ導入、ジャガイモ以外の作物、野菜も品質の向上、栽培面積の拡大に努めます。父から経営のバトンを受け継ぐ10年後までに大規模かつ高品質な作物生産方式を確立と「今金男しゃく」のブランド力向上による地域貢献を目標に、同じ志を持つ仲間と、今金町の、北海道農業の明日を耕す農業経営者を目指して進んでいきます。

「今金男しゃく」とともに未来へ。

過去原稿を見てみよう（分野Ⅱ類）

令和6年度農業クラブ全道意見発表大会入賞原稿
タイトル「シルボパスチャーで森と牛を未来へつなぐ」

さらさらとそよ風が森を吹き抜け、木漏れ日が牛の背を優しく照らす。耳をすませば小鳥の声、木の葉の揺れる音、牛が草をはむ音が聞こえる。遠くには新緑のかおる森でまどろむ淡いブラウンの牛が見える。私はそんな風景のなかで育ちました。我が家にはブラウンスイスが6頭、皆のリーダーである11歳のマーヤ、角がきれいな9歳のやっちゃん、マイペースな4歳の小麦、元気いっぱいな3歳の小毬、フサフサな毛並みの2歳のラピス、好奇心旺盛で賢い1歳のレタラ、みんなのんびりと過ごしています。

私の両親はとても小規模な酪農を営んでいます。北海道網走市の限られた中山間地域で酪農にチャレンジし、父は山の管理やツアーガイド、母は牛から頂いた牛乳でバターやチーズ、お菓子作りも行っています。牛乳はいくらでも飲めるほどさっぱりとしていて飲みやすく、チーズは放牧した牛乳特有の淡い黄色をしています。牛は晴れている日は夏でも冬でも、山に林間放牧（シルボパスチャー）をしています。

林間放牧は効率化が進む日本の酪農業において、実践している酪農家がほとんどいない飼育方法です。私は、両親と共にこの風景を守り、森と共生する持続可能な酪農として林間放牧を続けていきたいと考えています。

林間放牧にはメリットがあります。

1つ目は地球環境、森林、生態系にとてもいい点です。

まず、温室効果ガスの削減に効果的です。木のない放牧地に比べ、5〜10倍の炭素を吸収することができます。そして、牛が下草を食べることで森の保全につながります。父が間伐を行い、整備した森は植物が生育しやすくなり、広葉樹や牧草が豊富な里山のような森になりました。

2つ目に牛の健康、体重増加にもメリットがあることです。

森林では木々が日差しを遮り、体感温度は５℃下がります。牛の暑熱ストレスを抑制し、夏場も健康的に過ごせます。また、草と木の葉を食べることができるため、通常より餌が豊富にあります。特にマメ科の低木に含まれるタンニンには牛の第一胃のタンパク質分解を保護し、吸収するタンパク質が増える効果があり、体重の増加が期待できます。我が家の牛は、子牛の頃から放牧しているため足腰が丈夫です。削蹄の必要もなく、病気や怪我をしません。幼い頃一緒に過ごしたケリーちゃんという牛は、17歳まで生きました。今、最年長のマーヤも11歳になりますが、まだまだ元気いっぱいに放牧地に駆けていきます。このことからも私は、牛を長く健康に飼育する方法として、林間放牧は最適だと考えます。

3つ目に林産資源を得ることができる点です。森は豊かな資源を与えてくれます。我が家も森の恩恵を受けて生活しています。春には山菜を、秋にはコクワや山葡萄をよく食べています。そして、間伐の際に出たカラマツは、薪ストーブに使うことで薪の自給を行っています。森は守るだけでなく活かすことで、私たちの暮らしも豊かにしてくれます。

利点の多い林間放牧ですが、適正頭数で飼育しないと森林に負荷をかけてしまいます。我が家では過度に頭数を増やさず、我が家の森を使って［森カフェ］を運営しています。規模拡大ではなく、付加価値をつけた販路構築を行うことで、森林を守っています。また、放牧地の細部まで目が行き届かない、牛の状況が把握しにくいといった課題もあります。そこで私はトレイルカメラの導入を提案します。これにより放牧地の管理や牛の行動把握を容易にすることができます。これを我が家にも導入することで、脱柵や木の倒木など放牧地の状況を速やかに把握することができ、森の管理や保全につながると考えています。今、林間放牧が行われている土地は、世界の放牧地のわずか4％しかありません。2050年までにその面積が6％に広がれば、二酸化炭素を約31,2GT、世界の一年間のCO_2排出量とほぼ同量が削減できるのです。これは、ベストセラーの著書、「ドローダウン；地球温暖化を逆転させる100の方法」で第9位に位置づけられるほど高い効果と実践が期待されています。日本は国土の7割が森林です。管理されず荒廃している森も数多く存在します。私は、日本こそ森林放牧に向いていると考えます。私は今、両親の牧場や森の管理を手伝いながら、林間放牧による酪農について日々学んでいます。さらに、「森のようちえん」主催の講演会に参加し、林間放牧以外の森の活用方法について理解を深めました。インターンシップでは豚の放牧を行う牧場で研修を行い、牛以外にも林間放牧が効果的であることを学びました。また、放牧の原点である「遊牧」を学ぶためモンゴルへ研修に行き、環境に適応した農業の重要性を再認識しました。今後も帯広農業高校生であることを活かし、様々な牧場に研修にいきたいと考えています。

卒業後は経験を積むために、シルボパスチャーの取組が進んでいるヨーロッパの国々へ研修に行きたいと考えています。そのため帯広農業高校で酪農について実践的な知識だけでなく英語力も身に付けていきたいと考えています。環境によく、牛にも優しく、林産物を得ることもできる。そして、森と牛を未来へつなぐシルボパスチャー。私は森と共に生きる酪農家としての未来を実現します。

過去原稿を見てみよう（分野Ⅲ類）

令和6年度農業クラブ全道意見発表大会入賞原稿
タイトル「命を繋ぐ架け橋に」

　あたりは暗く、空にはまだ星が見える中、寒さに震えながら牛舎に向かう。パンパンに乳が張った牛たちが目に映り、「よし、やるぞ！」と自然とやる気が湧き出てくる。牛たちに「ありがとう」を伝えながら私の大好きな搾乳の時間が始まります。
　我が家は上川北部の士別市で酪農を経営しており、小さい頃から牛舎で遊んだり、仔牛にミルクをあげたりと私にとって牛たちは身近な存在。牛と毎日楽しそうに過ごす両親の姿を見て育った私にも気づけば「酪農家になる！」という思いが芽生え、帯広農業高校酪農科学科への進学を決めました。
　しかし、私はふと流れてきたある動画の言葉に衝撃を受けました。その言葉は見るに苦しいと書いて『見る苦』。そこには、私たちが普段飲んでいる牛乳は餌付けされ、仔牛を拉致された母牛の牛乳であると書かれていました。私はこの『見る苦』という表現や、酪農に対する批判的な考えにとても悲しくなりました。近年、動物愛護の考えが広がり、乳牛はもちろん、家畜に対してかわいそうという意見を耳にするようになりました。しかし、かわいそうだからと畜産物を食べなければ、私たち酪農家だけでなく、畜産物生産に携わる多くの人が職を失い、地域産業も衰退してしまいます。だからこそ、私は感謝をもって『命をいただく』という選択肢もあるのではないかと考えるようになりました。
　そんな中、母が静岡県の小学生に向けたリモート授業を行ったときのことを話してくれました。小学生からは「牛乳を出すのは白黒の牛だけなの？」「オスはお肉になってしまうことがわかった。」といった質問や感想が寄せられていました。この話を聞き、酪農を知らない子どもたちはスーパーに売られている牛乳や乳製品がどのように製造されているのか知らないことに気づきました。
母のこの活動は酪農業の大切さを伝え、産業を支える地域振興の一助になっている。私も酪農後継者として酪農と命の大切さを伝えていきたい。そこで私は次世代の酪農業を担う仲間とともにネットワーク〔命乳〕を立ち上げました。「牛乳は命のお乳、だから〔命乳〕」という先輩の言葉を引き継ぎ、酪農王国北海道を支える乳牛の命の大切さについて伝えることを目的とした活動に代表として取り組んでいます。
現在、この熱い想いを共有する学校の仲間たちと帯広農業高校の学校農場を活用したふれあい体験や酪農教育ファーム活動に取り組んでいます。牛の心音を聞く、ブラッシングや搾乳体験で体温を感じる、家畜の命を身近に感じてもらうとともに、北海道83万頭が生産してくれる生乳の重みを感じてもらっています。
今後はより命への理解を深めてもらう取り組みを行う予定です。秋には乳業メーカーのイベント参画や、食や体験を通じた学校農場での一日酪農体験イベントを企画しています。牛のことについて深く知ってもらうためのクイズ、牛乳がスーパーに並ぶまでの工程の学習、校内の様々な場所を使ったゲーム形式で楽しみながら理解を深めてもらいます。調理体験でもシチューなど牛乳を使ったレシピを検討しています。
牛とのふれあい体験では段階を踏んで少しずつ恐怖心を減らしながら実施していきたいと考えています。
また、この活動を後輩へと伝承し、〔命乳〕ネットワークを広げながら、多くの酪農業を担う仲間で繋いでいきます。そして、我が家でも実施していたリモート授業を活用し、地元だけでなくさらに多くの消費者に酪農家が愛情や感謝の気持ちを持って牛たちと共に生きていること発信していきたいです。
私は将来、酪農家として後を継ぎ〔命乳〕ネットワークで子どもに向け出前授業を行っていきたいと考えています。牧場にしかいない乳牛を学校へ連れていき、「命のお乳」が直接生産される現場を見せていきたいと考えています。その時は地元士別市と地域一体で取り組みます。特産品であるサフォークや、甜菜に牛乳を加えたコラボメニューを給食センターと開発し「ふるさと給食」で提供することによって牛乳の魅力を伝えていきたいと考えています。また、商工会や青年会議所といった組織に「農業未来都市」を掲げる士別の酪農の重要性を発信してもらうことで、地域振興につなげていきます。これを道内各地の酪農業を担う仲間がそれぞれの地域で〔命乳〕ネットワークを通じて取り組み、牛乳とは乳牛の命、生産者の思いが詰まった『命のお乳』であることを発信していきたいと思います。
そのためにも私は高校卒業後、大学へ進学し、酪農のことについてさらに多くの知識や技術を身につけるとともに、この取り組みに共感する多くの酪農業を担う仲間とネットワークを築いていきたいと考えています。北海道酪農の魅力は無限大！酪農家によって受け継がれてきた過去の命と、私たちがこれから羽ばたく未来の命、〔命乳〕ネットワークが命をつなぐ架け橋になります！